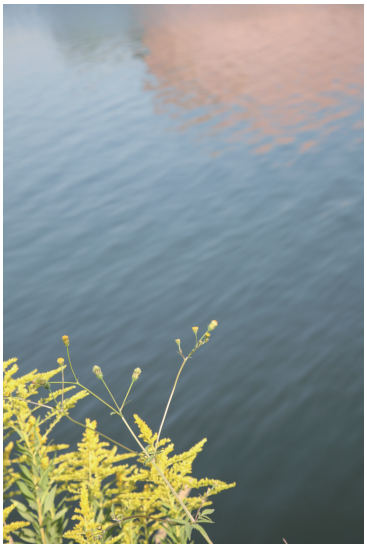
なごや文化情報

2012
7
Jul.

No.340

NAGOYA
Cultural
Information



公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2012
7
Jul.

NAGOYA Cultural Information No.340

Contents

七月のうた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
随想　小澤 寛 俳優 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
視点　名フィル定期演奏会を振り返る まとめ／小沢優子 ・・ 4
この人と…　岡本信也さん（下） 聞き手／酒井晶代 ・・・・・ 6
ピックアップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
おしらせ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

表紙

作品
「Canalbank」
(2012年/Oct. 110×73cm/Feb. 110×146cm/Oct. 110×73cm/デジタルプリント)

写真集「中川 運河 写真」のために、1 年あまりをかけ中川運河とその周辺の撮影をしました。特定の場所で撮影した写真の作品展示は初めてです。中川運河の風景を繋ぎ合わせていくと、時間でもなく場所でもなく静かに流れる水の形になりました。

櫃田　珠実（ひつだ　たまみ）
1958年　香川県高松市生まれ
1984年　愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了
1997年　英国王立芸術大学大学院（RCA）修了
1998年　エプソンカラーイメージング大賞　写真部門大賞受賞
2004-05年　「新花論」／東京都写真美術館
現在　　名古屋芸術大学デザイン学部准教授

七月のうた

ほら貝

島津（しまづ） 忠夫（ただを）

いつよりか源氏物語読むために来
る名古屋なりほら貝の夏

ほら貝は山の形が螺貝（ほら）に似ると聞
きしか遠き昔に

家だけは残してあれば売れといふ
不動産屋のまことうるさき

緑区ほら貝に住んで、当時は瑞穂区にあった愛知県立大学に通ったのは、もう遠い昔のことになってしまった。その頃から「源氏の会」が今に続いていて、毎月新幹線で通ってきて、その時だけはほら貝の家に一泊する。『源氏物語』を専攻しているわけでもないのにと自責の念を持ちつつ、結構楽しく大胆な放言に近い成立論を続けている。これはいずれまとめて大方の批判を得たいと思っているのだが、やがて八十六歳になろうという老齢、はたして可能なりや、否や。

（「マグマ」「日本歌人」）

随想

時代遅れの僕の戯言

小澤（おざわ）　寛（かん）（俳優）

僕が生まれたのは終戦後、日本がまだ高度成長期を迎える前の時代でした。いわゆる団塊の世代です。岐阜県の山沿いの小さな町で産声をあげ、幼い頃は田畑を駆け回り、川干しや魚釣りをしたり、大川で渦巻く急流を泳いだり、山登り、野鳥捕りに興じたものでした。

生後まもなく母を亡くし、祖母に育てられた僕は、月に一度、祖母に連れられ、田舎のバスにゆられ10キロほど離れた町の映画館に行くのが楽しみのひとつでした。東映時代劇全盛で銀幕のスター、ニューフェイスは僕の憧れ（夢のヒーロー）でした。

やがて、テレビが茶の間に出現して、ブラウン管から放映される映像は正にカルチャーショックでした。夢の宝庫でした。スポーツ観戦では、背番号3の長嶋さん、プロレスの力道山VSルー・テーズ戦、大相撲の栃若の熱戦、全てが僕のヒーローでした。

スクリーン、ブラウン管を通して会える彼らは偉大でした。また、彼らが写し出されるその時間をワクワクドキドキしながら心待ちにしたものでした。しかし、インターネット、電子機器が発達し、映画館やテレビのチャンネルをひねらないと会えなかった彼らの情報が安易に入手できてしまう昨今、偉大なヒーローはアイドルと化してしまいました。

今の僕のヒーローはMLBのイチローであり、横綱の白鵬です。彼らの活躍は僕の一日を元気にさせ、生きる勇気を与えてくれます。しかし、白鵬の活躍は車の中のテレビで、ふんぞり返っても見られるし、海の向こうのイチローのプレーもオンタイムで見ることができます。見逃してもVTRで何度でも再生できます。それは、誰もが嬉しいことではありますが、毎週決まった時間に正座してヒーローの登場の瞬間を待っていた頃が懐かしいです。

昔は遠く感じられたヒーローが今は手が届くように感じられ、身近なところに求めてしまうようですが、やはり憧れの存在で、遥か遠い人であってほしいものです。

僕は役者です。生涯現役として役者を続ける覚悟です。演劇人として、舞台に立つその時は、その日、その場、その時間にしか会えないヒーローを演じ続けて行こうと思っています。

Report 視点

名フィル定期演奏会を振り返る

名古屋フィルハーモニー交響楽団（名フィル）の定期演奏会が月１回公演から２回公演に変わって６年がたつ。公演回数が倍になって以前よりも多くの聴衆が聴くようになり、４年前にはティエリー・フィッシャーを常任指揮者に迎えて演奏のレベルも注目度もアップ。いろいろな動きのあったこの６年を振り返ってみた。　（まとめ:小沢優子）

◇定期演奏会が２日連続に

8月を除いて毎月1回ある定期演奏会が金曜日と土曜日の2日に渡って行われるようになったのは、名フィルが創立40周年を迎えた2006（平成18）年の4月から。2公演化とともに会場はすべて愛知県芸術劇場コンサートホールとなり、開演時刻も金曜日は午後6時45分、土曜日は午後4時に固定された。その時の事情については、早川立大前編集委員による本誌2006年3月号の特集「名フィル定期公演が様変わり」で詳しく述べられている。名古屋市民会館大ホール（現中京大学文化市民会館）と愛知県芸術劇場コンサートホールで定期演奏会が開催され、定期会員を年間のほか芸術劇場のみ、市民会館のみで募っていた当時、芸術劇場のほうの会員が多くなり座席数1800では希望の席が取りにくくなり、会員になることをあきらめる方が相当数に上ってしまった。そのため、会場は芸術劇場に定め、1回公演を2回公演にすることが問題解決の最善の方法だったという。

結果は良好で、定期会員の数も入場者数も飛躍的に増えた。客席の賑わいを見るたび、それまで1回公演だったのが不思議に思えたほどだ。とくに土曜日の回は観客が多く、くつろぎと華やぎの雰囲気が強く感じられたものだった。事務局によると、金曜日よりも土曜日の定期会員のほうが多いという傾向は現在まで続いており、土曜日志向はますます高まっているそうである。

◇常任指揮者の不在

定期演奏会が2日連続の形になり足を運びやすくなったのはよかったのだが、一方で、3年の任期を終えて退任した沼尻竜典の後の常任指揮者が決まらない事態となり、毎月違う指揮者が振ることになった。国内外の著名な指揮者、ソリストを揃えた多彩なプログラムは変化があって面白かったものの、次の年も常任指揮者不在となると、早く何とかしなければならないのではないか、という心配の声もきこえてくるようになった。名フィルが2年間も中心となる指揮者を持たなかったのは創立以来のこと。そんな不安定さを一気に吹き飛ばしたのがティエリー・フィッシャーである。

◇フィッシャーが常任指揮者に

ティエリー・フィッシャー

ティエリー・フィッシャーは、引き締まった明快な音楽づくりで定評のあるスイス生まれの指揮者。2008（平成20）年の4月から常任指揮者となり、定期演奏会に〈ツァラトゥストラ・シリーズ〉というテーマを掲げた。ニーチェの「ツァラトゥストラはこう語った」にちなむこのシリーズのプログラムは、ふだんはめったに演奏されない近現代の曲を数多く並べたもの。ハインツ・ホリガーの《トーンシェルベン（音の破片）》や藤倉大の委嘱新作のピアノ協奏曲《アンペール》、ツィンマーマンのトランペット協奏曲《誰も知らない私の悩み》といった日本初演の作品も含まれている。どれほどインパクトが強かったのかは、山野雄大氏の「全国のオーケストラ関係者がどよめいた、というのはあながち誇張でもない。…ティエリー・フィッシャーが打ち出した2008/09シーズンの定期演奏会プログラムは、なにしろ凄かった」（「音楽の友」2009年5月号の特別記事より）という言葉からもうかがえるだろう。

フィッシャー効果は大きく、定期演奏会だけでなく、「市民会館名曲シリーズ」でフィッシャーが振る時にも東京など遠方から聴きに来る人の姿が見受けられ、全国的にも注目を集めた年だった。

2年目は季節をめぐる〈四季シリーズ〉、3年目は各国の街を旅する〈都市と音楽シリーズ〉。1年目よりは穏やかな路線のプログラムになったが、フィッシャー色は随所に現れ、演奏面でも地元出身の若手ピアニスト北村朋幹や世界屈指のフルート奏者エマニュエル・パユの起用、国際的に名高いオーボエ奏者で作曲家のハインツ・ホリガーの指揮者としての登場、またフィッシャーが指揮するマーラーの交響曲第5番、第9番など、さまざまな聴きどころが盛り込まれた。

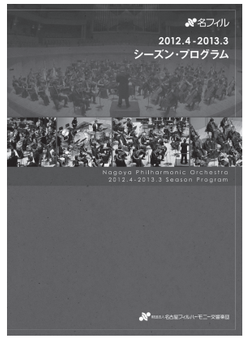
この間、名フィルの演奏レベルは向上。音色は磨かれ、アンサンブルの精度は上がり、ほかの客演指揮者が振る時でも何を伝えたいのかがよくわかるポジティヴな表現を見せるようになった。著しい進境ぶりだった。

◇プログラム冊子の充実

演奏には直接関係のない話だが、会場の入り口で毎回配布されるプログラム冊子が昔に比べて内容豊かになっていることにも触れておきたい。曲目解説やコラム、コンサートのお知らせや団員情報、会員名簿などの基本内容に「名フィル定期批評」が加わったのは、2公演制になった2006年の10月定期演奏会のプログラム冊子から。音楽評論家、ジャーナリスト、ライターに定期演奏会を批評してもらうというこのコーナー。執筆者は地元にとどまらず東京や大阪在住者にも及び、名フィル定期演奏会を外側からの目線で客観的にとらえていてなかなか興味深い。

また、近現代の曲が多くなった〈ツァラトゥストラ・シリーズ〉の2008年頃からは、次回の演奏曲目のおすすめCDの紹介記事も載るようになったり、曲をもっと理解しやすいようにと解説の中に楽譜が添えられるようになったり、いつのまにかプログラム冊子はお客様にとってたくさんの情報を提供してくれる資料価値のあるものへと変化している。

◇再び常任指揮者不在に



今年度のシーズン・プログラム
年間予定が掲載されている

フィッシャーが2011（平成23）年3月に退任すると再び常任指揮者のポストは空席になったが、4月からは「正指揮者」にキャリアのある円光寺雅彦、「指揮者」に20代後半の新鋭、川瀬賢太郎を据え、この二人と客演指揮者の体制になった。川瀬は2008年4月の定期演奏会のリハーサルの指揮の代役をつとめたことから名フィルと関わりを持ち、2010年6月の定期演奏会を指揮。「指揮者」に就任してからも、的確な指示と率直な音楽性で魅力ある演奏を聴かせている。

今年度の定期演奏会は〈音楽で紡ぐ「世界の物語」シリーズ〉と銘打ち、世界の神話、伝説、歴史にまつわる楽曲を中心に構成されている。4月はフィンランドの叙事詩「カレワラ」によるシベリウスの《レンミンカイネン組曲》。5月は有名なハーメルンの笛吹きの物語を素材にした現代アメリカの作曲家ココリアーノの《「ハーメルンの笛吹き」幻想曲（フルート協奏曲）》。指揮は川瀬で、前衛の手法を駆使しながらも鮮やかな物語性を帯びた音楽を見事にこなし、新鮮な舞台作品に仕上げていた。

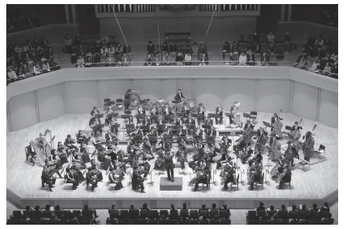
ところで、川瀬は「市民会館名曲シリーズ」の6月の「ドヴォルザーク・セレクションⅠ」と12月の「第九演奏会」、7月の「海の日ファミリー・コンサート」も振ることになっている。名フィルの活性化とともに若い聴衆層の開拓にもつながるのではないかと期待がかかる。

◇マーティン・ブラビンスを迎える

次期常任指揮者のマーティン・ブラビンス

昨年の12月、ロイヤル・フランダース・フィルハーモニー管弦楽団首席客演指揮者であるイギリス人のマーティン・ブラビンスを2013（平成25）年度からの常任指揮者に起用することが発表され、来年4月の正式就任に先立ち、今年度から「次期常任指揮者」として指揮してもらうことになった。ブラビンスの登場は7月の定期演奏会と来年2月の「ドヴォルザーク・セレクションⅢ」。すでに名フィル定期演奏会を2回振り実力を評価されているブラビンスの演奏は、来年度からの新しい時代を予感させるものになるだろう。

過渡期というのだろうか、ここ数年名フィルの楽団員の世代交替が進んでいる。2008年度から2011年度までに定年による退団が15人、途中退団が5人、計20人が退団している。2012年度から2014年度にも退団予定は10人以上にのぼるので、3年後には全体の半分弱ぐらいが入れ替わっていることになる。


今年の3月定期演奏会
指揮は正指揮者の円光寺雅彦

今年度を締めくくる来年の3月の演奏会で、名フィル定期演奏会は400回を迎える。記念すべき回は、名誉指揮者モーシェ・アツモンによるマーラーの交響曲第3番。そして、翌年度に入ると、ブラビンスの常任指揮者としての本格的な活動が始まる。定期会員の高齢化、優秀な楽団員の確保、世代交替と平行しながらの名フィル・サウンドの継承と発展。さまざまな課題とどのように向き合っていくのか。名フィルのこれからの更なる充実に期待を寄せたい。

この人と…

考現学採集・野外活動研究

岡本（おかもと） 信也（しんや）さん 下

日常に根ざし、日常を超える

前号で紹介したプルリングをはじめ、ゴミバケツや食品パック、植木鉢や消火栓など、岡本信也さんは考現学の立場からさまざまなモノを採集し、記録してこられた。さらに採集対象はモノのみならず、地下鉄車内での足の組み方や荷物の持ち方といったヒトのしぐさ、あるいはコップの水滴や雨だれのような自然現象にまで広がっている。あくなき観察へと岡本さんを駆り立てるものは何か。日常生活を観察し、採集することが、「ヒト」とは?「ヒトが見る」とは? といった日常を超える問いへとつながっていくところに、ひとつの答えが潜んでいるようだ。（聞き手：酒井晶代）

都市（まち）へ——亀山巌氏との出会い

山村や離島から出発した岡本さんのフィールドワークは、まもなく都市部にもエリアを広げていく。都市への関心を決定づけたのは、戦前から名古屋で考現学を実践していた亀山巌氏（1907～1989年）の「村もいいが、街も」との助言だったそうだ。

「たとえば山村の民家で台所を見せてもらうとするでしょう。ぼくたちがフィールドワークを始めた70年代には立派なかまどは残っていてもすでに使われておらず、その隣に自動炊飯器が置いてありました。古いかまどの上で最新の自動炊飯器を使う、こうしたある種の矛盾のなかにこそ、人々の『いま』があります。古いモノだけを取材していては現実を見ていることにならないと思いました。考現学という分野を知ったのは1976、7年ごろでしたが、野外活動研究会の活動を通して自然に考現学の見方を身につけていった感じです」

「亀山さんとは、ぼくらが徳山村で行ったフィールドワーク報告書を書店で手にとってくれたことが縁で出会いました。詩人、挿画家、編集者など、たくさんの顔を持つ多面的な人。ぼくは一言でいうと雑学の人だと思っていますが、洞察力があって、細部や断片の中から対象の本質を探りあてる眼=考現学の眼の持ち主でした」

1986年11月29日　現代風俗研究会の催しで（左が亀山巌さん）

1987年　伊勢河崎でのフィールドワーク

「観察」の難しさと面白さ

日本雑学大賞と橋本峰雄賞をダブル受賞した『超日常観察記』（情報センター出版局、1993年）や続編にあたる『万物観察記』（同、1996年）をはじめ、岡本さんの著作は妻の靖子さんとの共著が多い。1973年に結婚され、以来ともにフィールドワークをしてこられた。『超日常観察記』には「ヒト科生物の全・生態をめぐる再発見の記録」というサブタイトルが付けられているが、例えばしぐさの採集など、おのれの行動を言い当てられたようでドキリとする半面、人類というユニークな生物を外側から捉えなおすような面白さがある。こうした観察はどのようにして可能になるのだろう。「観察すること」や「見ること」をめぐる、岡本さんの次の言葉は示唆に富む。

「ぼくたちは普段、見たいものだけを選択的に見ています。全体を見ているようで実はそうではないんですね。『即物的に』見ることは考現学の重要な方法のひとつですが、普段見過ごしているモノやコトに眼を凝らすことは、実はとても難しい。だからこそ、仲間とともに観察することは大事です。見たものを互いに報告しあうと全く別々のモノに眼を留めていることは珍しくありませんし、自分の見方の偏りに気づくことができます」

ご著書のなかでは、考現学採集のまなざしを「モグラや宇宙人の眼」と表現しておられる（『超日常観察記』）。人が人を客観的に観察することは決して容易ではないが、それだけに自らの先入観や固定観念を解体する契機となり、「観察者の内面を豊かにする」実践でもあるという。

岡本信也・岡本靖子　共著
『超日常観察記』　情報センター出版局 1993年
『町のけんきゅう』　福音館書店 2000年

計測器（スケール）の役割

ふだん持ち歩いている計器類を見せていただいた。ストップウォッチ、温度計、計数器、折尺のほか、ひび割れを測るクラックスケールや傾斜の大きさを調べる水平器などもそれぞれミニサイズのものを愛用しておられる。カメラも使用するそうだが多用はしないとのこと。「眼で覚える」ことと「メモする」ことが基本で、道具はあくまでサポート役のようだ。

「モノサシ=計測器を用いる一番の目的は、数値化することで自らのものの見方からいったん離れることにあります。ただし、数字で出てきた結果だけで物事を断定することには危うさが伴います。われわれの暮らしはそうたやすく数値化できるものではありません。時間や場所が違えば、結果ががらりと変わることもあるでしょう。現実を見ようとする考現学の難しさがここにあります。わかったふりをすると見えなくなってしまう。『わからない』ということをわかっておくことが大事なのです」

「写真に全てが記録できるわけではありません。たとえばゴミ箱を観察する場合、材質の厚みやへこみ具合は自分で見て、触って確かめないと『見た』ことにはならないでしょう。発表時に写真ではなく手描きの図や絵（図解）を用いるのもそのためです。描くことで観察者が『見たもの』をはじめて受け手に伝えることができます」

愛用の計測器とカメラ

次世代の考現学に向けて

ここで前号のプルリングに立ち戻ってみたい。いわゆるコレクターがモノを収集することと、岡本さんたちの採集との違いとは何か。

「集めはじめたらキリがないのは事実。でも細部に熱中しすぎて本質的なことを忘れないよう意識しています。多少キザな言い方になりますが、われわれの暮らしがどういう意味や価値を持つのか、どのような歩みを経てきて、これからどう変化していくのか、そうした問題意識を持ちながら採集しています。見て歩くことを通して生活全体をつかみたいのです」

著作のみならず、展覧会やワークショップを通して考現学採集の面白さを広めてきた岡本さん。近年では『町のけんきゅう——世界一のけんきゅう者になるために』（福音館書店、2000年）のような子どもたちに観察や町歩きの魅力を伝える絵本を上梓し、大学の教壇にも立っておられる。考現学という分野は分析や体系づけが難しいそうだが、「次世代への橋渡しのためにも間違いを恐れず体系化を試みたい、ここ数年そう考えるようになりました」と話してくださった。

酒器の変遷、若者の髪形の特徴、中高年層の服装の変化など、このあとも話題は尽きなかった。銭湯の話題が肌着の話題につながり、そしてしぐさや身体感覚と結びついていく…いつまでも聴いていたいお話だった。（了）

ピックアップ

名古屋シネマテークで4月に上映された「らもトリップ」

今は亡き鬼才を「再確認」した熱い夜

故・中島らも氏を追悼する映画「らもトリップ」が4月7日〜13日、今池の名古屋シネマテークで上映された。初日にはアフタートークも催され、立ち見が出る盛況ぶりだった。そもそもこの映画は「配給：東京芸術大学」とのクレジットからも判るように、学生が作り上げた映画なのだ。原作選びから台本作り、実行委員会の結成、監督、役者への依頼、撮影から制作、営業まで、年に一本、全て自分たちで手掛け、丸ごと現場を学ぶわけだ。「ウチが東芸大作品を掛けるのは3回目。原作ありきってのが基本ルールで、以前は川端康成、伊坂幸太郎だった。今回話をもらった時、よく中島らもを取り上げたよなって感じでしたね」と話すのはシネマテーク支配人の平野勇治さん。学生たちの志向も毎年様々で、シネコン配給を狙う派手な年もあるらしい。

作品の方は、らも氏の短編小説3本を学生が映画化し、その前後を、各界著名人が中島らも氏を語るドキュメンタリーが包み込むような構成。特に後者は竹中直人、宇梶剛士、古田新太、大槻ケンヂら、生前親交の深かった面々が、破天荒で人懐っこい故人のエピソードを惜しみなく語る。この「らも語り」と若い感性の映像で「中島らも体感」を得た観客は、映画の最後、放送禁止用語を少しも辞さない故人の名曲「いいんだぜ」をフルコーラスで味わう。まさに単館ロードショウならではの、シネマテークの濃密空間でしか味わえないような映画だった。

「ウチは、制作費の多さを話題にして、ゆったりした座席に座って『じゃあ楽しませてもらおうか』って人は決して足を向けない映画館ですからね。何かを得ようと自ら一歩踏み込んでくれる観客に支えられている。その意味で、死後7年を迎え、特に名古屋だと少しずつ忘れられかけている中島らもさんを『再評価』できた今回の作品は意義深いと思います」と平野支配人。

初日のアフタートークでは、かつて名古屋プレガイドジャーナルを支え、大阪に移ってからは中島らも氏の盟友として共著も多い編集人・小堀純氏がゲストに来名。貴重なエピソードを笑い満載で紹介し、東京からの学生監督やプロデューサーも飛び入り参加、平野氏も自ら司会進行を務め、会場からの質疑応答も盛り上がった。そして終演後は近くの居酒屋に席を移して、深夜まで映画談議、らも談議が続いた。若い作り手にとって、この名古屋での熱い夜が新しい創作活動の刺激になればと願う。まさに「今は亡き鬼才」が結びつけた縁なのだから。

本編を見逃した方は、秋ごろにDVD発売の噂も聞こえているのでご注目を。またシネマテークでは恒例の自主製作映画フェスティバルを今年も12月に開催の予定だ。まだ見ぬ新しい才能を発掘する楽しみも、下町映画館ならではのコトに違いない。　（H）

映画「らもトリップ」のチラシ

昭和の趣？　シネマテークの受付

支配人の平野勇治さん

おしらせ

名古屋市文化振興事業団 事業案内・チケットガイドでは各種の事業案内、チケット販売をいたしております。
平日 9：00〜17：00／チケット郵送可　　TEL 052-249-9387／FAX 052-249-9386

Information

『ショートストーリーなごや』ショートフィルム上映

個性溢れる珠玉の作品を上映する「スターキャット プレミアシネマセレクション シーズン1」において、名古屋を舞台にした短編小説コンテスト『ショートストーリーなごや』第4回受賞作品を原作に、公募で選ばれた気鋭の監督が撮影したショートフィルムを上映します。（名古屋初公開）

日　時　7月14日(土)〜16日(月・祝)
会　場　伏見ミリオン座、センチュリーシネマ
上映作品　『ハトビト』（監督：岡田真樹／原作：渡山博崇）
『鈴の音』（監督：高松明子／原作：赤村英行）
『新堀川の上で』（監督：山口智／原作：加藤陽一郎）
料　金　劇場基本料金に準じます。
※ショートストーリーなごや映像化作品のみは無料上映
問い合わせ　名古屋市文化振興事業団 事業案内　TEL 052−249−9387

ハトビト

Information

伝統文化シネマ鑑賞会7・8・9月

日本の伝統文化を未来に――人間国宝の卓越したわざ、各地域に伝承されてきた民俗行事は、時代を超えて私たちに語りかけてきます。優れた無形の伝統文化を記録した映画を月1回、各文化小劇場にて上映します。

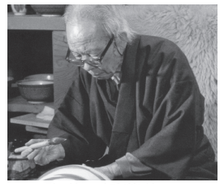
本編終了後に、名古屋を舞台に気鋭の監督が撮影したショートフィルム「ショートストーリーなごや」映像化作品を上映いたしますので、あわせてお楽しみください。

日時・会場・上映作品
7月4日(水)14:00　南文化小劇場
①狂言　「狂言師ー三宅藤九郎ー」(32分・1984年完成)
②島根　「神々のふるさとー出雲神楽ー」(41分・2002年完成)
8月17日(金)14:00　東文化小劇場
①染織　「彩なす首里の織物ー宮平初子ー」(40分・2003年完成)
②漆芸　「重要無形文化財　輪島塗に生きる」(34分・1990年完成)
9月19日(水)14:00　天白文化小劇場
①漆芸　「磯井正美のわざー蒟醤(きんま)の美ー」(40分・1992年完成)
②陶芸　「呉須三昧ー近藤悠三の世界ー」(32分・1983年完成)

料　金　無料(当日先着順)
問い合わせ　南文化小劇場(定員:394名)　TEL 052−823−6511　FAX 052−823−6512
東文化小劇場(定員:349名)　TEL 052−719−0430　FAX 052−719−0440
天白文化小劇場(定員:350名)　TEL 052−806−8060　FAX 052−806−8050
主　催　公益財団法人名古屋市文化振興事業団／公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団

狂言師・三宅藤九郎

染織・宮平初子


陶芸・近藤悠三

Information

KOBUDOー古武道ー　〜尺八・チェロ・ピアノ コンサート〜

邦楽界の貴公子・尺八奏者の藤原道山、東京都交響楽団首席チェロ奏者・古川展生、様々なアーティストに楽曲を提供しているピアニスト・妹尾武。それぞれ異なったジャンルの第一線で活躍する3人が今年も名古屋に集結します！

日　時　9月26日(水)18:45
会　場　青少年文化センター・アートピアホール
料　金　〈全指定席〉
SS席(1F)5,000円　S席(1F)4,000円　A席(2F)3,000円
※事業団友の会会員は1割引(前売のみ)
※未就学児の入場はご遠慮ください
問い合わせ　名古屋市文化振興事業団 チケットガイド　TEL052-249-9387

NAGOYA GROOVIN' SUMMER 2012

中高生から社会人バンドまで幅広いステージを展開し、多くの市民の皆さんにビッグバンドジャズを楽しんでいただきます。特に、プロアーティストと学生たちとの共演は見所の一つです。

日時・会場

7月28日（土）
オアシス21 銀河の広場　13:00〜19:40
ナディアパークアトリウム　14:00〜19:20

7月29日（日）
オアシス21 銀河の広場　13:00〜19:40
ナディアパークアトリウム　14:00〜19:20

料金
無料　※一部ライブハウスを除く。

ウェブサイト
http://groovin-nagoya.com/

問い合わせ
名古屋市文化振興事業団 事業案内
TEL 052−249−9387

ゲスト

オアシス21 銀河の広場

7/28（土）ピストルバルブ

7/29（日）BLACK BOTTOM BRASS BAND

ナディアパークアトリウム

7/28（土）仲田美穂 CORAZON LATINO

7/29（日）宮川純カルテット

郷土が生んだ名作曲家 吉澤検校 雅の世界
〜現代に響く古典の調べ〜

尾張藩に生まれ、江戸時代末期に名古屋・京都を中心に活躍した吉澤検校は今も演奏され続けている数多くの作品を世に残しました。

今回は吉澤検校が残した作品のなかから、上演が稀な秘曲や、今回のために編曲を委嘱した作品などを織り交ぜた他では聴けない曲を地元の三曲の横断的団体である名古屋三曲連盟の演奏によりお贈りします。

日時 10月13日(土)15:00
会場 青少年文化センター・アートピアホール
曲目 千鳥の曲、編曲 千鳥の曲(編曲:菊重精峰)、春の曲、山桜、花の縁、捨扇
出演 司会・解説／葛西聖司(アナウンサー・古典芸能解説者)
演奏／名古屋三曲連盟
料金 3,000円〈全自由席〉
※事業団友の会会員は1割引(前売のみ)
主催 公益財団法人 名古屋市文化振興事業団、名古屋市、名古屋三曲連盟
問い合わせ 名古屋市文化振興事業団 チケットガイド　TEL 052−249−9387

舞台VTR映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。

ビデオソフトの企画・制作
有限会社 エーワン.ビデオ.システム
TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100

TOKAI VIDEO SYSTEM
ハードシステム部門
AV機器販売部門（家庭用）
映像企画・制作部門
放送関連部門
機器設備レンタル部門
映像メディアの未来を創る
生きた情報を発信
TVS 株式会社 東海ビデオシステム
名古屋市中区上前津二丁目14-15　TEL.<052>322-6541(代表) 6562(芸能部)

innovason Ether ES Sound L-ACOUSTICS lake whirlwind
■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守
A&V Professional Use 株式会社エーアンドブイ
〒464−0846
名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL052（761）5400
FAX052（761）0909

9月定例公演《名古屋能楽堂開館15周年記念特別公演》
◆能・狂言と文学　—時代を越える“ことば”と“こころ”

室町時代前期に大成した能・狂言は、それ以前に成立した古典文学から題材を得て作られました。そして、能・狂言もまた、後代の文学に影響を及ぼしています。今年度の定例公演では、近現代の小説や戯曲の題材となった能・狂言の作品を主に取り上げ、時代を越えて受け継がれてきた日本文学の魅力をお伝えします。

9月公演は、日本文学における“めでたさ”や“祝賀”を表現した能「嵐山」始め5曲を開館15周年記念の特別公演としてお贈りします。

【一部】 能　「嵐山(あらしやま)」白頭(しろがしら)(観世流)　／シテ　久田勘鷗
間狂言「猿聟(さるむこ)」(和泉流)　／　佐藤融
能　「猩々(しょうじょう)」(金剛流)　／シテ　竹市幸司
【二部】 能　「草子洗小町(そうしあらいこまち)」(観世流)　／シテ　祖父江修一
祝言能「岩船(いわふね)」(宝生流)　／シテ　衣斐愛
狂　言「賽の目(さいめ)」(和泉流)　／シテ　松田髙義

日時 9月2日(日)【一部】 10:00
【二部】 14:00

料金 【一部・二部各】
〈指定席〉5,000円　〈自由席〉一般4,000円／学生2,000円
※事業団友の会会員は1割引(前売のみ)
※当日券は自由席のみ500円増
※6月29日(金)発売

問い合わせ 名古屋能楽堂　TEL 052-231-0088　FAX 052-231-8756

能「嵐山」

人形浄瑠璃「文楽」

わが国の伝統的な舞台芸術であり、ユネスコ無形文化遺産である人形浄瑠璃「文楽」。名古屋市芸術創造センターで昨年に引き続き2日間4公演をお贈りします。

昼の部では、「桂川連理柵」から六角堂の段、帯屋の段、道行朧の桂川を上演します。1761年に桂川(京都)で遺体で見つかった、親子ほど年の違った成人男性と少女の事件を浄瑠璃ではすぐに心中として取り上げました。本作は、安永5(1776)年、北堀江市の側芝居で初演された、菅専助の上下二巻の世話物で、今回は下の巻(六角堂、帯屋)と後に補われた道行をお楽しみいただきます。

夜の部では、昭和16(1941)年、四ツ橋文楽座で初演され、二人の禿が羽根をつき、鞠をついて遊ぶ京の遊郭・島原の情景を描いた愛らしい景事「二人禿」と人形浄瑠璃の黄金期、延享4(1747)年に竹本座で初演され、浄瑠璃三大傑作の一つに数えられる「義経千本桜」から落人となった平維盛が隠れていた吉野で、維盛を探して来た妻子に偶然に再会する、すしやの段をお贈りします。

「桂川連理柵」帯屋の段

演目 昼の部:「桂川連理柵」六角堂の段、帯屋の段、道行朧の桂川
夜の部:「二人禿」「義経千本桜」すしやの段
日時 10月4日(木)【昼の部】14:00　【夜の部】18:30
10月5日(金)【昼の部】11:00　【夜の部】15:30
会場 芸術創造センター(地下鉄東山線「新栄町」駅①番出口より北へ徒歩3分)
料金 〈全指定席・各部とも〉
一階席4,500円　二階席2,500円
※事業団友の会会員は1割引(前売のみ)
※未就学児の入場はご遠慮ください

問い合わせ 名古屋市文化振興事業団チケットガイド
TEL052−249−9387
※名古屋市文化振興事業団が管理運営する文化施設窓口でもお求めいただけます。(東山荘を除く)

チケット発売 友の会先行発売　7月10日(火)、11日(水)
※会員専用特別電話設置
※名古屋市文化振興事業団友の会
(年会費3,000円)へぜひご入会ください。
一般発売　7月18日(水)

文化庁「平成25年度新進芸術家海外研修制度」のご案内

芸術家、アートマネジメント担当者、評論家などの方を海外に派遣し、研修していただく制度です。

応募を希望される方は、下記までお問い合わせのうえ、8月6日（月）までに必要書類をご提出ください。

募集案内配布・問い合わせ
名古屋市市民経済局文化振興室 企画事業係
TEL052−972-3172

名古屋市民会館の名称(愛称)が、平成24年7月1日から変わります

名古屋市民会館のネーミングライツ・パートナーが、平成24年7月1日から、日本特殊陶業株式会社に変わります。これにともなって、施設名、ホール名等が下記のように変わりますので、ご理解いただきますようお願いします。なお指定管理者に変更はございません。

新名称

施設名	日本特殊陶業市民会館(にっぽん)
大ホール	フォレストホール
中ホール	ビレッジホール
地下鉄連絡通路	日本特殊陶業市民会館連絡通路

問い合わせ 名古屋市市民経済局文化振興室文化施設係
TEL 052-972-3175

「なごや文化情報」編集委員

飯塚恵理人（椙山女学園大学文化情報学部教授）
小沢優子（名古屋音楽大学講師）
倉知外子（オクダ モダンダンス クラスター副代表）
酒井晶代（愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授）
田中由紀子（美術批評／ライター）
はせひろいち（劇作家・演出家）

当事業団の募集する事業にお申し込みいただいた場合の個人情報は、当該事業に関する事務連絡及び、当事業団の文化事業に関する案内のみに使用させていただきます。

ナゴヤコドモアートビレッジ

ナゴヤコドモアートビレッジは、子どもたちがさまざまな芸術に触れることで普段味わえない感動や、発見があることを願い8月26日(日)～28日(火)の期間中、日本特殊陶業市民会館(6月30日までの名称：中京大学文化市民会館)を会場としてクラシックコンサートとさまざまなジャンルのワークショップを開催いたします。

コンサート

動物たちのシンフォニー ～オーケストラで聴く動物たちの名曲集～

セントラル愛知交響楽団の演奏による子どものためのクラシックコンサートを開催いたします。今年は動物にまつわる名曲が楽しめる内容となっています。コンサートチケットを購入された方はバックステージツアーにご応募いただくことができます。

日時 8月26日(日)14:00
会場 ビレッジホール(中ホール)
出演 セントラル愛知交響楽団
古谷誠一(指揮)
吉田絵奈(鍵盤ハーモニカ)
大津裕香(歌・ナレーション)
曲目 口笛吹きと子犬／ブライヤー
踊る子猫／アンダーソン
音楽物語「動物の謝肉祭」／サン=サーンス ほか
料金 1,500円〈全指定席〉
※3歳以上有料。
※3歳未満でもお席が必要な場合はチケットをお買い求めください。

セントラル愛知交響楽団

バックステージツアー

※コンサートチケットを購入された方のみが対象となります。

応募方法 往復はがきに下記の内容を記入のうえ、**6月30日(土)〈消印有効〉**までにご応募ください。応募された方の中から抽選で**60名様**をツアーにご案内いたします。
〈往信〉①参加者全員のお名前(フルネーム)
※ハガキ1枚につき5名まで応募可能です。
②応募者の郵便番号・住所・お名前
③電話番号
〈返信〉ご自分の郵便番号・住所・お名前
応募先 〒460−0008
名古屋市中区栄三丁目18−1 ナディアパーク8階
名古屋市文化振興事業団
「アートビレッジ バックステージツアー」係

ワークショップ

小学生から中学生を対象とした様々な芸術・文化ワークショップを実施します。全15講座ありますのでぜひご応募ください!

7月7日(土)〈消印有効〉までに往復はがきでのお申し込みが必要です。詳しくはホームページをご覧ください。

日程 8月26日(日)～28日(火)
時間 午前の部10:00 午後の部14:00
会場 リハーサル室、会議室
内容
(演劇)劇団うりんこ【おもってみよう、つくってみよう、劇づくり体験】
(茶道)山口宗浩【「和の心」を体験してみよう！】
(舞踊)寺原 幸【生活の身近にある物を利用して踊ってみよう】
(華道)太田ひろ子【かわいい!!「いけばな」っていな】
(音楽)吉田絵奈【よくわかる鍵盤ハーモニカ♪】
(演劇)演劇人冒険舎【セリフで遊ぶ～心が動くと ことば は踊る～】
(メディアアート)鈴木悦久【太鼓で動かすアニメーション】
(作文)諏訪哲史【作文とは「真剣勝負でふざけること」】
(版画)中田由絵【版画 はじめてのドライポイント】
(ラジオ)川島 葵【東海ラジオがやってくる!】
(造形)D.D.(染谷亜里可+今村哲)【迷路を創ろう迷ってみよう】
(ジャズダンス)小野里加【明るく元気にDancing!!】
(イラスト)三輪布巳子【カラーイラストを描く】
(音楽)セントラル愛知交響楽団奏者【体感!室内楽(合唱&リコーダー)】
(三味線)杵屋六春【唄って弾いて楽しもう!三味線体験】
料金 無料～材料費1,000円程度
応募方法 〈往信〉①希望のワークショップ名 ②参加者全員のお名前・学年・年齢(3名まで)
③応募者の郵便番号・住所・お名前 ④電話番号
〈返信〉ご自分の郵便番号・住所・お名前
応募先 〒460−0008 名古屋市中区栄三丁目18−1 ナディアパーク8階
名古屋市文化振興事業団 「アートビレッジ」係
※1つのワークショップにつき1通のハガキにてご応募ください。
※参加費が必要なものは当日お支払ください。
※応募多数の場合は抽選とさせていただきます。
※各講座とも1時間半から2時間を予定しています。

〈ホームページ〉http://art-village.info ナゴヤコドモアートビレッジ 検索

〈主 催〉公益財団法人名古屋市文化振興事業団、名古屋市 **〈後 援〉**名古屋市教育委員会

〈問い合わせ〉名古屋市文化振興事業団 事業案内 TEL 052−249−9387

デザイン・印刷／山菊印刷株式会社
なごや文化情報は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。
平成24年6月25日発行(毎月1回25日発行)通巻340号 編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 〒460−0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 TEL(052)249-9385 FAX(052)249-9386 HP http://www.bunka758.or.jp